人材育成に 新聞のちから

読売新聞大阪本社の「新聞のちから」研修を導入する企業や団体、学校が、約300社・団体となった。社会全体でリカレント教育の必要性が高まる中、社会人の基礎となる「読む」「書く」「話す」力を高めようと、積極的に取り入れる企業などが増えているためだ。新聞記者のノウハウを生かして、報告書や企画書など実践的な文章の書き方や、営業や職場でのコミュニケーションの取り方を伝える講義が、それぞれのビジネスの場で役立っている。

研修実績 300社・団体 突破

2017年に発足した新聞のちから事務局は、新聞を教材に研修や講義を有償で実施しています。講師はベテランの新聞記者経験者で、取材、執筆、編集活動で培ったノウハウを生かしたメニューを用意しています。毎日届く新聞を教材に、生徒、学生、就職内定者から新入社員、幹部や経営トップまで幅広い層に対応し、ご要望に応じて内容もカスタマイズします。

問い合わせは
読売新聞大阪本社 新聞のちから事務局
電話 06-6366-1880 (平日午前10時～午後5時)
メール o-chikara@yomiuri.com
新聞のちから 大阪
導入例はこちら

質問力の講義でグループワークに取り組む受講者（神戸市東灘区で）＝尾崎孝撮影

新規導入 ビジネスに「コミュニケーション力」

国内有数の酒どころ・灘五郷の酒造会社で、1743年創業の「白鶴酒造」（神戸市東灘区）では、2024年度に初めて、新聞のちから研修を導入した。マーケティング本部の社員16人が、6月に文章の書き方、10月にはコミュニケーションをテーマに、計約9時間の研修を行った。

狙いは「伝える力」の向上。森伸夫本部長（執行役員）は、部署の課題として「最も伝えたいことや結論が、相手に正確に伝わっていないのではないか」と感じていたという。職場や取引先との会話や文書のやりとりの中で、相手の話を正しく理解したうえで、自分の考えを簡潔明瞭に伝える力を養うため、研修の実施を決めた。

10月の研修では、提案書の書き方と発表の仕方を学んだあと、「質問力」の講義に臨んだ。まず講師が、ビジネスの場における質問力は「自分に有益な情報を引き出し、話の主導権を握るためのもの」と説明。質問力を高めるためのポイントを示した。

その後、受講者は3人1組のグループワークに取り組んだ。「最近、力を注いでいること」という設定で質問を交わし、その内容をもとに記事を書いた。具体的な取り組みや、開始時期を聞き出してペンを走らせた受講者は、「書いていくうちに聞き忘れがあることに気付いた」「話を膨らませる項目を間違った」などと振り返っていた。

計2日間の研修を終え、森・本部長は受講者の変化を実感している。「学んだことを実践するだけでなく、メンバーで共有し、指摘し合える環境も整ってきた」と手応えを話す。「わかりやすい研修。今後は他部署にも広げたい」と語った。

白鶴酒造の研修日程

	6月	10月
10:30	わかりやすく伝えるために	伝わる提案書を書いてみよう
12:00	昼食(1時間)	
13:00	伝わるビジネス文書を書くポイント	提案書をプレゼンしてみよう
14:30	休憩(10分)	
14:40	実際に報告書を書いてみよう	記者に学ぶ質問力
16:10	終了	

リピート 「プレゼン力」に磨き

事業アイデアのヒントを見つけるために新聞をめくる受講者たち（大阪市中央区で）

読売新聞が新聞のちから研修を始めて8年目。リピート率が高く、毎年研修を続けている企業も多い。

筆記具大手「ゼブラ」では、大阪支店（大阪市中央区）の社員が2019年度から毎年、受講している。22年度は文章力、23年度は質問力を学んだあと、24年度は11月に「プレゼン力」の研修を受けた。

社員15人が参加。朝刊の記事を読んで、事業や新商品のアイデアを考え、企画書を作成し、1人ずつプレゼンテーションをするワークに取り組んだ。

選んだ記事をヒントにアイデアを絞り出すという慣れない作業に苦労しながら、全員が企画書を書き上げ、1人2分で発表した。ポン菓子製造機の記事から、駄菓子製造のイベントを発案するなど、現実的でユーモアあふれる内容が多かった。

受講後は「今までの研修で一番難しかったが、勉強になった」「新たな発見が多かった」という声が寄せられた。

教育現場 社会課題の「探究力」

新聞がテキスト

10人から数百人までOK

研修費(1コマ) 1人4800円

▲ 新聞で社会課題の解決策を探る高校生（堺市東区で）

新聞のちから研修は教育の場でも需要が高まっている。初芝立命館高校（堺市東区）では、1年生約330人を対象に、昨年10、11両月、新聞を用いて社会課題を考える講義が開かれた。

同校は、文部科学省から、先進的な理数教育を目指すスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けている。活字情報から社会の課題を見つけ、解決策を探るプロセスを学ぼうと企画した。生徒たちは、地球温暖化に関する記事を読み、対策をグループで話し合った。「公共交通機関を利用する」「二酸化炭素の吸収技術を発展させる」などと発表し、探究力を磨いた。

初芝立命館中学・高校の花上徳明校長は「スマホでは自分の関心のあることしか画面に映らない。生徒に大切なのは、新聞など自分の知らないことを教えてくれるメディア」と強調した。